

氏名	くわはら のりこ 桑原 典子
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲 第26号
学位授与年月日	平成24年9月30日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論文題目名	利休の茶の花 —その成立の背景『齡花集覽』を中心に—
審査委員	主査 倉澤 行洋 副査 Horst Siegfried Henneman 同 大村 皓一

一、論文内容の要旨

茶道といけばなは、日本において育くまれ発達してきた、日本を代表する伝統芸術であり、また「天地我と同根、万物我と一体」の語に示されるような、人と自然との一体を旨とする東洋的思想に深く根を張った東洋的芸術の代表的なものである。

この二つの伝統芸術が、誕生から今日に至るまでさまざまな形で交流交渉を持ったことは疑いなくところであるが、それは従来学問的に研究されることはあまり無かった。ありていに言えば、それを研究しようにも、両者を結びつける、はつきりした接点が見当らなかつたのである。

第二次大戦後、西堀一三氏によって『齡花集覽』という新資料が紹介された。その内容は千利休と初代池坊専好との間に師弟関係のあったことを示すものであった。

本論文はこの『齡花集覽』に新たな光を当て、またその他のさまざまな関係資料を検討して、茶道といけばなの共通の根源を説明しようとしたものである。

本論文は本文五章と「序論」と「結」によって構成され、参考文献と『齡花集覽』を中心とする資料紹介が附載されている。以下にその目次を、ついで、内容の要旨を各章ごとに示す。

目次

凡例

序章

第一節 研究の目的

第二節 茶の花に関する先行研究

第三節 取り扱う基本的な諸資料について

第四節 研究の方法

第一章 「生花」の成立史からの検討

第一節 「生花」の源流から近代の花へ

(一) いけばなの源流

(二―一) いけばな以前

(二―二) いけばなの源流

(二) いけばなの成立

(二―一) いけばなの誕生

(二―二) いけばなの成立

(三) いけばなの大成

(三―一) 「生花」の大成

(三―二) 「抛入花」から「生花」へ

(四) いけばなの近代化

(五) 戦後の社会といけばな

第二節 床の間の変遷より考える

(一) 座敷の成立と文化の発達

(二) 押板から床の間への変化

(三) 座敷飾りとしての「立花」から城郭の「立花」へ

(四) 草庵の花

第三節 結論 座敷飾りの花から草庵の花への大きな移り変わり―「式正の花」から「茶の花」へ

第二章 池坊の花の伝の変化

第一節 池坊における「生花」の登場とその歴史的背景―池坊専慶から二代専好まで

第二節 伝書からの検討

(一) 『仙伝抄』より窺える「生花」の風体

(二) 『専応口伝』より読み取れる事

(三) 専栄が『専応口伝』に「生花の事」項目を加えた意味

(四) 初代専好の活躍―『百瓶花序』より窺える評価

(五) 『抛入花伝書』と『生花傳書』(『齡花集覽(卷十一中)』所収)の係わりと「生花」の伝書の成立

第三節 結論「立花」に対する「生花」の地位の確立

第三章 利休の「茶の花」の変化―利休の花に関する記録より

第一節 利休の花に関する諸記録からの検討

(一) 利休の挿花についての最も古い記録『松屋会記』

(二) 利休の好む花の意義『宗湛日記』

(三) 「茶の花」は侘び茶の思想と趣向の表現『南方録』

(四) 茶の花の真髓『山上宗二記』

第二節 池坊の「生花」と利休の「茶の花」の思想の共通性

第三節 結論 侘び茶の花の成立を考える

第四章 利休と初代専好の関係

第一節 『齡花集覽』卷十九(下)「古哲生花四箇伝」からの検討

(一) 谷貫室咲之事

(二) 一輪花之事

(三) 葉無花花無葉之事

(四) 瓢之事

第二節 服部英翁『生花伝書』との比較

(一) 『齡花集覽』と『生花伝書』(服部)の絵図(説明文含む)の比較

(二) 『齡花集覽』と『生花伝書』(服部)の奥書の比較

(三) 利休と初代専好の作例より読み取られる特徴

第三節 結論『齡花集覽』と『生花伝書』(服部)によって証し得る事

第五章 利休と専好に纏わる逸話や聞き書き

第一節 利休と初代専好の茶席の花―『江岑夏書』『江岑咄之覚』『逢源齋書』より

(一) 竹の花入

(二) 侘び茶の花には白い花が好ましい

(三) 利休と初代専好の交わり

(四) 禁花について

(五) 立花と茶の花に共通する格

第二節 『茶話指月集』より窺える利休像

(一) 赤き花と牡丹

(二) 利休朝顔の茶の湯

(三) 紅梅の生け様

(四) 鋭い眼力、優れた見識や美意識

(五) 棗の塗りの良し悪しを見分ける

第三節 結論 利休と初代専好の通い合う心

結

結論と分析

参考文献

資料

凡例

(一) 【『齡花集覽』外題簽 二十卷 十二冊(米村孝月蔵)】

(二) 【『齡花集覽』序文】

(三) 【『齡花集覽』卷十九下「古哲生花四箇伝」の奥書 加藤正治の添文 影印】

(四) 【『齡花集覽』卷十九下「古哲生花四箇伝」の奥書 加藤正治の添文 翻刻】

- (五) 【『齡花集覽』卷十九上「古哲花形立花」】
- (六) 【『齡花集覽』卷十九下「古哲生花四箇伝」】
- (七) 【谷貫室咲之事 一輪花之事 影印(拡大) ①】
- (七) 【谷貫室咲之事 一輪花之事 影印(拡大) ②】
- (八) 【谷貫室咲之事 翻刻】
- (九) 【一輪花之事 翻刻】
- (十) 【葉無花花無葉之事 影印(拡大)】
- (十一) 【葉無花花無葉之事 翻刻】
- (十二) 【瓢之事 奥書 影印(拡大)】
- (十三) 【瓢之事 奥書 翻刻】
- (十四) 【『生花伝書』服部英翁 東京大学総合図書館(南葵文庫蔵)】
- (十五) 【『生花伝書』服部英翁 奥書】
- (十六) 【『齡花集覽』卷十一中「生花伝書」奥書】

付表

まず第一章では、「生花」の源流・成立・発展・変遷を辿る事により、「茶の花」の根源、「生花」が成立する基盤や歴史的背景を確認する。室町時代に成立した『君台観左右帳記』『御飾記』『花王以来の花伝書』などの諸伝書から、「立て花」から「立花」に移り行く大きな流れを辿っていく中に、「生花」の様式は窺うことができるのか。また、床の間の変遷を確認する事を通じて、座敷の成立と生活文化の発達、草庵における花などのあり方の変化との相関性を考えてゆく。

第二章では、池坊における「生花」の成立過程を伝書などから取り上げ、「立花」に対するその位置付けの変化と当時新たに生まれつつあった「生花」に関する思想について考察する。

具体的な方法としては、専応、専栄、初代専好、の伝を主とし、『仙伝抄』『専応口伝』及び『専応口伝』の「生花の事」『百瓶花序』『抛入花伝書』『齡花集覽』の「生花伝書」などの検討をしながら、「立花」と「生花」の歴史における「生花」の位置付けの確立過程と、そこ

に考えられようとした思想を考える。

第三章では利休の花が実際にどのようなものであったのかを、当時の茶の湯の記録、すなわち茶会記より探る。その他の記録に残された利休による挿花、また門弟達が伝える挿花についての言語録や、逸話にも触れる。現在伝えられている利休の逸話などには少なからず伝説的な面もあり、また後世になって利休に仮託された逸話も多くあると思われる。しかし、ここではそれらを歴史的事実を伝える資料として取り扱うのではなく、それらがいずれも利休という名前で語られるある共通する視点において、夫々繋がりをもち、相互に影響しあっているという事実を踏まえ、利休の花というものが茶の湯の歴史においてどのような観点の下に形成されてきたのかを考える一つの手掛かりとして、それらの検討を行う。具体的には、『松屋会記』『宗湛日記』を一次資料とし、『南方録』『山上宗二記』等を参考にしながら、利休による花と花入れが扱われた会の内容を検討する。

第四章は、本論文の研究の中心となる、利休と初代池坊専好との関係についての考察である。ここでは『齡花集覽』に収録されている「古哲生花四箇傳」より「谷貫室咲之事」「一輪花之事」「葉無花花無葉之事」「瓢之事」を取り上げ、利休と初代専好とがお互いにどのような点に関して一致し、どのように影響し合っていたのかを考える。また、『齡花集覽』に共通する絵図が収録されている『生花傳書』と比較検討を行い、利休と初代専好がどのような精神、思想を伝えようとしていたのかを検討する。そして、利休と初代専好の作例より読み取られるその花の特徴を、『零流生花書』『生花之書』を取り上げ比較検討する。

第五章は、利休と初代専好に纏わる逸話や聞き書きをまとめた『江岑夏書』『江岑咄之覚』『逢源齋書』『茶和指月集』などを中心に、利休と初代専好の交わりや利休の茶と花に処する態度を検討する。これらの逸話の検討を通じて問題としたい事は、「いつ」「誰と誰が」「どこで」「どうして」という歴史的事実の検証ではなく、利休の侘び茶に対するその態度が示す方向性である。書院台子を根本としつつ侘び茶の境地に至るといふ過程に見られる構造が、茶の世界においても花の世界においても共通するものであった事を検討する。

結では、以上の検討を元に結論と分析とを行う。『齡花集覽』などの花伝書に収録された絵図の検討を通じて明らかにされた、利休と初代専好の精神・思想の相重なる部分とその関係性をここでは明らかにする。そして、書院台子の茶を出発点とし、池坊に学んだ利休の侘び茶の花の成立について述べ、結論とする。

利休の茶の湯において、花は掛物と同等の重要な位置を占めるものであった事は疑いのない事実である。茶事において初座での重要な掛物に代わるものとして、後座で同じ位置に掛けられる花の扱い、思い入れには特別なものがあつたはずである。そこには利休の茶の花に関する意識、侘びの本質が当然深く投影されているのではないだろうか。

利休と初代専好の花は、「古哲生花四箇伝」に示されているように、姿形の美を追求するためのものではなく、花を生ける亭主の思い入れ、姿勢、意気込みを表現するためのものであり、茶の心・花の心を如何に表現するかを目指したものであった。その花は、利休がおよそ七十年の生涯をかけて巡りえた境地、茶道を大成させるため、様々な苦悩を積み重ねて到達した芸術の世界でもある。現在残されている利休の花に関する資料は極めて少なく、今日参照する事ができる資料についても数々の問題があり、その全貌を解明する事は難しいが、利休の茶の花の成立背景とそこで目指されていたものを、本論文では少しでも解いていきたいと思う。

二、本論文の評価さるべき特色

本論文の評価さるべき特色を、以下に箇条書きする。

① 右に各章ごとの要旨を述べたが、全五章の前に「序章」が置かれ「研究の目的」「先行研究」「資料説明」「研究方法」が述べられ、論文の全体はその趣意に沿って展開され、全体が起承転結のはっきりした堅固な構成をなしている。

② 本論文の核心をなすのは第四章の「利休と専好の関係」で、第一章「生花の成立史からの検討」第二章「池坊の花の伝の変化」、第三章「利休の茶の花の変化―利休の花に関する記録より」は、第四章を述べる準備段階といふべきものであるが、この準備段階が、まことによくまとめられ整理されている。特に第一章「生花の成立史からの検討」は、「茶の花」が生まれてくるまでの、「立ち花」「立花」「生花」の流れを明確に説き明かし、簡にして要を得たすぐれたいけばな史になっている。

③ 右の「生花の成立史からの検討」の中でいけばな成立に二つの源流があるとして、仏前供花に起源する座敷飾りの流れとともに、花の持つ霊的なものを形として整え、一輪の花から自然の営みを想起できるようにする流れのあることを明確に示した。

④ 生花は早く立花の盛んな時代に既に、その裏の花として生けられており、『専応口伝』において表の花として表されることになったとの指摘は花道史における新しい見方である。そして生花も茶の花も、式正の花つまり立花の草体化によって成立したことを明確に示し、それは利休の草庵の茶が台子の茶の草体化であることと軌を一にしていることを示した。

⑤ 利休と初代専好は、単なる師弟関係ではなく、その思想において多く通じるところを持っており、茶の花と生花とは共通の根源に基づくものであることを示した。これは本論の論者の創見である。

⑥ 解読のむずかしい原資料に正面から向い合って、資料として生かした努力に敬意を表したい。

三、残された課題

『齡花集覽』が利休の茶のどの部分に通じているか、つまり、書院台子の草体化によって利休の侘び茶が成立したと見た場合、そのどの過程に『齡花集覽』の「谷貫室咲之事」「二輪花之事」「葉無花花無葉之事」「瓢之事」が、どのように影響したかを、より明確に示してくれることを期待する。

四、審査結果の要旨

本委員会は、以上の如き観点から、本論文を、着想の獨創性、叙述の仕方、構成の整合性、などにわたって慎重に審査した結果、全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。